北海道新聞　2006年（平成18年）11月26日（日）

幕末期　米国から単身利尻島へ

鎖国下の幕末期、利尻島に上陸し「日本初の外国人英語教師」となった米国人ラナルド・マクドナルドの業績を語り継ぐ市民団体が、マクドナルドの出身地、米オレゴン州を中心に地道な活動を続けている。単身、漂流者を装って未知の島国に入国し、日本人と心を通わせたマクドナルド。その冒険心は時代を超え、地元の人々の心をとらえて離さない。（米オレゴン州アストリア、枝川敏寛、写真も）

英語教師伝説　故郷でも

にちよう特報

マクドナルドは最近になって日本の中学校や高校の教科書で取り上げられるなど、知名度が高まってきたが、三十年ほど前は、マクドナルド生誕の地・オレゴン州アストリアですら、無名に近い存在だった。

そこに光を当てたのは、当時アストリア図書館長だったブルース・バニーさん（73）。一九七二年のある日、書庫を整理していると、それまでだれも読んだ形跡のない厚雲処分寸前のマクドナルド伝が偶然、目に留まった。聞いたことのない名前だったが、マクドナルドは歴史に単身、小型ボートで漂流者を装って利尻島に上陸した、ペリー率いる黒船の来航の5年前のことだった。

ラナルド・マクドナルド（アストリア文化遺産博物館提供）

ラナルド・マクドナルド　1824年、スコットランド系の父、北米先住民の母との間に、現在のオレゴン州アストリアに生まれる。北米先住民と日本人の祖先が同じだと信じ、鎖国下にあった日本への入国を決意。米捕鯨船の船員となり、1848年、捕鯨船が日本近海に来た際に単身、小型ボートで漂流者を装って利尻島に上陸した。ペリーの来航の5年前のことだった。

密入国の疑いで、松前を経て長崎に送られたが、上陸から本国送還までの半年間で、14人の日本人に英会話を教えた。教え子には、ペリーとの交渉で通訳を務めることになった森山栄之助がいる。マクドナルドは日本で終始丁寧な扱いを受け、帰国後も日本には好意的だったとされる。1894年に米西海岸のワシントン州で亡くなる際、「サヨナラ」の言葉を残した。

マクドナルド生誕記念碑の前で思い出を語るバニーさん

バニーさんは七四年、アストリア市長らに働き掛け、マクドナルド生誕百五十周年の記念事業を実施した。

生誕日もマクドナルドと同じ。「伝記との出会いは、ただの偶然とは思えなかった」というバニーさんもまた、六一年から二年間、驚異の経済成長を遂げていた日本に興味を抱き、富山県で英語教師を務めていたからだ。

書籍寄贈や記念碑建立　市民団体　地道に活動

友の会会長としてマクドナルドの講演を続けるモックフォードさん

現在、同会はオレゴン州住民ら六十人のボランティアから成る。寄付金を集めては、マクドナルドの伝記を各地の図書館や学校に贈り続けている。これまでの寄贈先は二百カ所に及ぶ。また、現会長の歴史研究家ジム・モックフォードさん（73）が中心となって、マクドナルドの生誕を各地で講演している。

モックフォードさんが、マクドナルドの姿を自身に重ね合わせる一人だ。三十年ほど前、当時、在籍していたオレゴン大学日本語学科の担当教授からマクドナルドの物語を聞かされた。それがきっかけとなり、日本の言葉と文化をより深く学ぼうと、早稲田大学への留学を決意した。

絶えず海風が吹きつけるアストリア中心部の坂の上に、マクドナルド生誕を記念する石碑がある。州内の日系企業などからの寄付金により、八八年の友の会発足と同時に建てられた。英語と日本語で、波打ち際に横たわる男の物語が刻まれている。毎年、マクドナルドが生まれた二月三日、同会メンバーの手で花が手向けられるという。